

シベリウスと縁のあった日本人音楽家 ～ その1 小船幸次郎 ～

米村 真二 (会員番号 532)

今年、2019 年は日本とフィンランドが国と国とのおつきあいを始めてから 100 周年という記念すべき年である。それでは日本とフィンランドとの音楽上のおつきあいはいつごろから始まったのだろうか？ 第二次世界大戦後であるなら、渡邊暁雄と舘野泉という二人の偉大な先達のおかげで、今日に至る太く強い絆ができあがっている。しかし戦前、戦中はどうか？ 何もなかったのだろうか？ するとシベリウスと縁のあった二人の日本人音楽家の存在が見えてきたのである。

そこで今春号と秋号の 2 回に分けて彼らの事跡を紹介しようと思う。今回紹介するのは 1939 年 6 月 14 日にアイノラ荘でシベリウスと会見した小船幸次郎である。



ここで本題に入るまでに、1919 年から 1939 年に至る日本におけるクラシック音楽事情を簡単に押さえておきたい。1919 年前後といえば、一言で言って「山田耕筰の時代」であった。1910 年にドイツ、ベルリンに留学した山田は日本人初の管弦楽曲「序曲ニ長調」を、卒業制作では日本人初の交響曲「かちどきと平和」を書き上げた。そして 1914 年にはこれまた日本人初の本格的な歌劇「墮ちたる天女」をベルリンの劇場で上演する契約までこぎつけたものの、第一次世界大戦の勃発のために頓挫。その後戦禍を避けて帰国した山田

は本格的なオーケストラを組織して日本国内で自作を中心とした演奏会を次々開いていく。さらにそれでも飽き足らず、1919年渡米し、カーネギーホールにて自作管弦楽作品のみのコンサートを実現したのであった。山田の前に今日まで演奏機会のある作品を残している作曲家は、ひとり「荒城の月」等の歌曲を書き、その後夭折した滝廉太郎のみである。そして山田と並ぶ日本クラシック音楽草創期の巨匠とされる1歳若い信時潔（最近、代表作の交声曲「海道東征」の復活演奏が増えている）にいたっては1920年になってようやくドイツ留学が実現したぐらいなのだから。ちなみに現在のN響の元になる新交響楽団が組織されたのが1926年、東京音楽学校に正式に作曲科が設けられたのが1932年。当時の我が大日本帝国のクラシック音楽事情とはこういうレベルであった。はてさて、その山田は20年代に入ると、日本で西欧クラシック音楽を普及させるには、抽象的な交響曲やソナタはまだ早すぎる、日本でも古くから大衆に親しまれている歌舞伎のようなストーリー性のある劇作品から入るに限ると判断。日本語による本格的なオペラ制作を夢見つつ、詩人北原白秋と組んで多くの童謡を作曲し、日本語を西欧風のメロディーの上に、違和感無く紡ぐ技法の研究に没頭していく。

そうして1920年代も終わりのころから、ようやく1900年前後に生まれた世代の作曲家が様々な形で活動を始めるのである。例えば1903年生まれの諸井三郎は、山田のそういうやり方に反発を覚え「やっぱり西洋音楽の真髄を学ばなくては」とドイツ古典音楽、とりわけベートーヴェンの音楽の分析からその音楽修行を始めた。また1906年生まれの池内友次郎といえば日本人として初めてパリ・コンセルヴァトワールに1927年入学。そして卒業後ここで培った作曲技法を東京音楽学校に植え付けることで、日本のクラシック音楽の水準をヨーロッパ並みに引き上げようとした。いずれもまずはしっかり西欧音楽の基礎を身につけましようというわけだ。

（ここに自作を披露するためには全国から演奏家を集めるところから始めねばならず、そのために借金を重ねていった山田耕筰と、まがりなりにも定期公演を行うオーケストラが存在する上に、片や秩父セメントの創立者一族であったり、片や短歌界の巨星高浜虚子の次男坊であったふたりとの、時代背景的、経済的な違いからくる芸術創作上の道程に、違いが出るのも当然と言えば当然だったかもしれない）

この諸井、池内という理論派の両巨頭の影響は凄まじく、長らく日本の作曲界を支配することになった。その一方で山田の音楽は西洋流過ぎる、もっと日本人らしい音楽を創造すべきであるという「民族派」と目される人たちもいた。彼らは日本、或いは東洋風の五音音階や、民謡主題の使用に重きを置いた。またどちらかという苦学独学の人が多かったため、両巨頭の側からは「作曲技法が貧弱である」という揶揄を受け続けることにもなった。

そして小船幸次郎の登場である。会員の皆さんの中で彼のことをご存知だった方はどれぐらいおられるだろう？ 彼は戦前から戦後にかけて活躍した作曲家、指揮者だった。1956年刊行の富樫康著「日本の作曲家」では1章を割いて紹介されている重要人物だったのである。しかし音楽之友社の1999年の刊行物「日本の作曲20世紀」ではわずか3箇所触れられているに過ぎない。現在では一般的にはほぼ忘れられた音楽家である。

彼は 1907 年 4 月 4 日に横浜で生まれた。そして父が羽衣座という演芸場を運営していたため、幼少から邦楽と演芸をたしなむ環境で育った。しかしそこは横浜という土地柄、様々な西洋音楽もここかしこで聞こえる中、小船の関心はそちらへと移っていったようである。

特に活動写真館で弁士の伴奏を務めるオーケストラ（といっても 10 人から 15 人前後）の音楽がお好みだったようだ。これをなんとか自分たちでも演奏したいと願うものの、当時一般の少年が手に入れられる洋楽器はハーモニカしかなかった。そこで彼はハーモニカアンサンブルを組織して、見様見真似で指揮をしたり編曲も行って実現したという。さらに旧制中学卒業後、18 歳で日本楽器に就職してからはマンドリン・オーケストラの活動に加わり、ここでもオーケストラ曲からの編曲と指揮を手がけるようになる。そしてこうした活動とともに始めた作曲は、ほぼ独学だった（後に東洋好きの作曲家アレクサンドル・チェレプニンが来日した際に短期間の指導を受けたのみである）。また指揮のほうも独学だったが、こちらは後に新交響楽団指揮者に迎えられるヨーゼフ・ローゼンシュトックに師事している。彼には相当鍛えられたのだろう、後に海外での指揮活動をまかされたり、新響の指揮団のひとりになったぐらいなのだから……。

さてこうして実地で鍛え上げられる中、作曲された彼の作品は 1930 年代後半、彼が 30 歳を迎えるあたりから次々とコンクールに入選し、俄然世間の注目を集めるようになる。

- ・ 1937 年（昭和 12 年）2 月 日本放送協会コンクール 第 1 組曲 3 位
- ・ 1938 年（昭和 13 年）4 月 第 6 回音楽コンクール 序曲第 1 番 1 位
- ・ 同 新交響楽団邦人作品コンクール 祭りの頃 入選

そして 1936 年に書かれた弦楽四重奏曲第 1 番が、1939 年にポーランド、クラカウ市で開催された第 17 回国際現代音楽祭にて見事入選を果たし、国際的にも注目を集めるのである。

その彼の作風はどのようなものであったのか？ 彼自身が 1938 年（昭和 13 年）に音楽誌上で語った内容の一部を紹介すると

「私は徹頭徹尾在来の日本から音楽の要素を採る事に努めている。つまり旋律は勿論のこと、和声も旋律から割り出した創作であり、リズムも日本にしか無いものの演繹である」とあるように作曲のスタイルといい、音楽とのかかわり方といい、先に述べた当時の日本の作曲界では「民族派」と呼ばれるグループの一員だったと言えるだろう。今回の取材では、いくつか彼の作品を録音で聴くことができた。まずは代表作である「祭りの頃」を若杉弘指揮 N響の録音で聴いた。大変華やかで明るい民謡調の響きは、R・コルサコフやレスピーギの音楽の日本版といったような雰囲気だった。或いは小山清茂や外山雄三の先達といったところだろうか。小船と関係の深かった（後述する）横浜交響楽団の録音で聴くことのできた「序曲第 1 番」でも同様の感想を持った。いまひとつの代表作とされる、雅楽を取り入れたという「弦楽四重奏曲第 1 番」は最近レコーディングされ、そのほかの室内楽の代表作と合わせて年内にも発売されるというからは是非聴いてみたいと思っている。

さていよいよシベリウスとの会見へと繋がる小船の海外渡航について記していこう。

1939 年（昭和 14 年）1 月 28 日、小船幸次郎は日伊学会の推薦を受け、イタリア外務省の中亜極東協会に、音楽使節としてローマ・サンタ・チェチリア音楽院指揮科に留学するために日本を出立した。そして同年 8 月 11 日に帰国する間に、イタリア各地、ワルシャ

ワ、ヘルシンキにて日本人作品を紹介するコンサートを開催していったのだった。そして小船がヘルシンキに行ってシベリウスと会見するという話は当初から計画されたものではなく急遽決まったものであることがわかった。ここからは時系列的に小船の行動を追って行ってみよう。

(1939年6月9日)

2度目のワルシャワ訪問（1回目は4月中旬、第17回国際現代音楽祭に招かれ、入選作「弦楽四重奏曲第1番」の演奏に立ち会っている）における「現代日本音楽の夕」演奏会を無事終えた小船は、在日本ポーランド大使館酒匂秀一大使から声をかけられる。ローマに帰る前にフィンランドに寄ってシベリウスに会って見ないかと勧められたのであった。もちろん小船は快諾。ただこの段階では演奏会を開くことまでは決まっていなかった。

(6月12日)

飛行機にてワルシャワからヘルシンキに旅立つ。

(6月13日)

日本公使館とヘルシンキ放送局の間に18日の日曜日に50分間のスタジオ放送をすることが決まる（日本の音楽事情の解説と日本人作品の演奏を実況放送する）。

(6月14日)

本日より、フィンランド国立放送交響楽団とのリハーサルを始める。そして練習の余暇を利用してヤルヴェンパーのアイノラ荘を訪れたのである。

この会見の様子は、日本に帰国後「音楽新潮」という音楽雑誌の1939年9月号に、小船自身が書いた「イタリア・ポーランド・フィンランド バトン紀行抄」から紹介しよう。「今年になってまだ外国の訪問客に会ったことがない好々爺の彼は、快く迎えてくれた。彼は文化振興会の市川氏が在フィンランド当時、親しくして大の新日家だった。日本歌曲も製本して持っていたし、和訳の《カレワラ》も読めないながらも大切にしていた。多少アルコール中毒のせい最近ではフィンランド一の美人といわれた、女優をしていた夫人が、口述で譜を書くのだそうだが（編注：この部分は小船のまったくの誤解）それでも巖のごとく矍鑠たる彼、今は年金をもらって作曲に専念している彼、しかしどこか子供らしい口数の少ない彼は、始終愛想がよく自分では飲まない酒などを勧めながら、日本で彼の作品が演奏されるのを喜んだりした。カメラは持っていったが、どうしても撮らしてくれといえないような親しみをもって惜しい別れをしてきた」

後に小船がこの会見について語ったものから少し補足しておこう。後の回想なので、1939年当時、シベリウスがほぼ創作活動を終えているという認識はあった。また愛好していた葉巻のせい、ウオッカのせいはわからないが手が震えており、楽譜も文字も書けない状態であったようだ。会話は英語で行われたが、シベリウスはもっぱら聞き役だったようだ。小船は日本からのお土産品とともに自作の12曲からなる「日本の子供へ送るピアノ曲」や「弦楽四重奏曲第1番」の楽譜を渡している。またシベリウスの前で、小船が追求する日本の旋律、和声、リズムからつくられたピアノ曲を数曲弾いたようだ。シベリウスは「日本人は日本人の音楽を大事にしなければならない。なぜなら祖国の伝統に根ざした音楽こそ真の感動を生むのだから」と言って小船を励ましたそうだ。先の小船の作曲

上の身上を語った内容を思うと“我が意を得たり！”という感銘を覚えたことだろう。「このシベリウスの言葉は当時前衛的な音楽のみ心を奪われていた私に大きなインスピレーションを与えた」と述懐している。評論家片山杜秀氏によれば、この会見の様子を小船は帰国後、伊福部昭たち作曲家に話したらしい。会見時には、ヘルシンキで演奏する自作以外の日本人作曲家のスコアも持参していてシベリウスに見てもらったそうだ。その中で最もシベリウスが関心を示したのは伊福部昭の「日本狂詩曲」であったという。



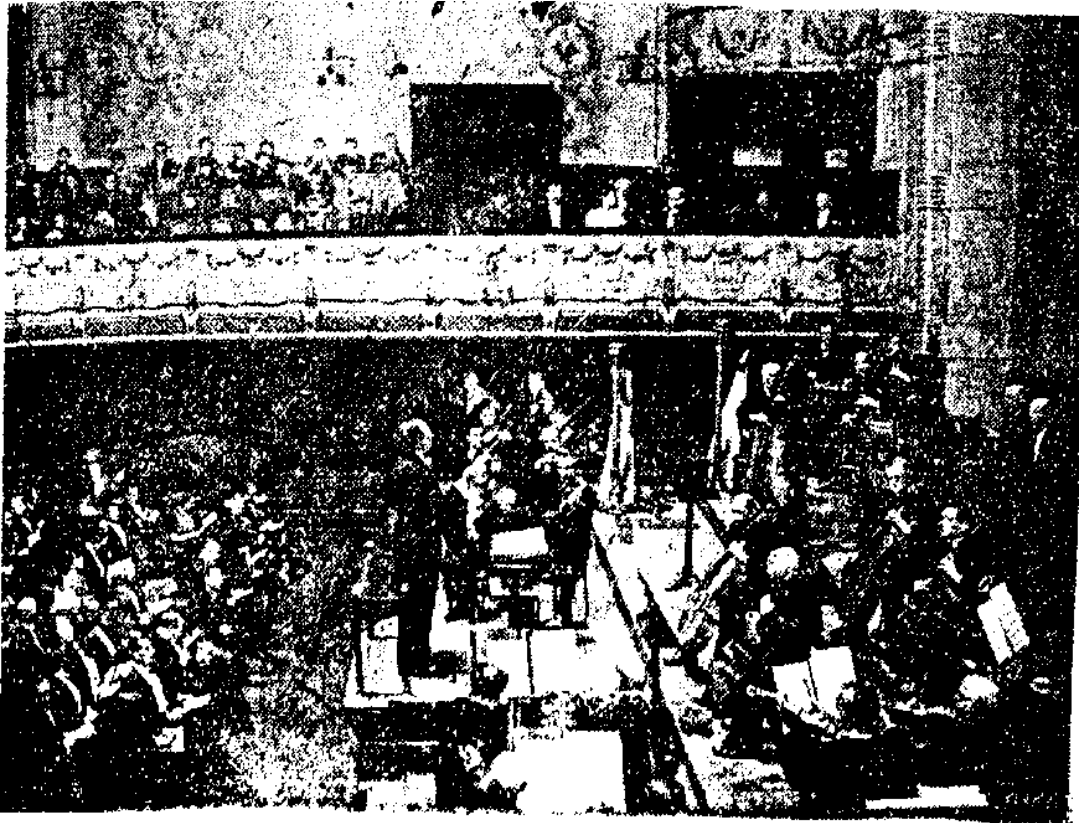
小船がシベリウスの前で弾いたピアノ作品の楽譜。表紙デザインも小船自身のもの

(6月18日)

予定どおりヘルシンキ放送局にてフィンランド放送交響楽団を指揮し、実況放送された。演奏曲目は下記のとおりである。

- ・伊福部昭 日本狂詩曲より「夜曲」
- ・須賀田磯太郎 交響的舞曲
- ・箕作秋吉 ヴァイオリンと管弦楽のためのソナタ
- ・小船幸次郎 祭の頃

そして放送終了後、小船に電話が入った。何と実況放送を聴き終えたシベリウスからの祝福の電話だったのである。小船の感慨はひとしおであったことは想像に難くない。



残念ながらヘルシンキでの演奏会の写真はない。これはその少し前、6月9日ワルシャワでの演奏会の写真

ここで当時の世界と日本の情勢について触れないわけにはいかないだろう。1939年といえば小船がワルシャワでコンサートを開いた僅か3ヵ月後の9月1日から、ナチス・ドイツ軍がポーランドへの侵攻を開始、すかさずソ連もポーランドの東側から攻め上がり、ポーランドは両国に分割占領されて国家としては崩壊してしまう。第二次世界大戦の始まりだ。そしてフィンランドでは1938年春から始まったソ連との外交交渉がいよいよ暗礁に乗り上げ、小船の演奏の5ヵ月半後の11月30日からは対ロシアとの「冬戦争」に突入していくのである。

日本とはいえば1931年の「満州事変」から始まった日中戦争は既に泥沼化し、1933年には国際連盟を脱退するなど国際的に孤立化を深めていく。国内では1936年に「二・二六事件」が勃発、その後の軍国主義化に拍車がかかる時期であった。そこでは音楽をはじめすべての芸術活動から前衛的、進歩的なものは忌避せられ、民族的、愛国的傾向の強いものが求められるような時代的雰囲気横溢していたのである。こうした中で文化活動の海外への発信が積極的に行われていく。映画では日独合作の「新しき土」を製作(1937年)、また小船を初め、日本現代音楽を紹介する海外派遣が行われた。「新しき土」は海外かぶれの日本人青年が帰国後日本精神に目覚め、ドイツ人の婚約者と別れて親が定めた許婚者(原節子!!)とともに、開拓団として満州国に行くという内容であった。また小船が海

外で演奏した作品リストを見てみると、先に述べた諸井、池内のような「理論的」な作品よりも、民族的傾向の強い作品を主に取り上げており、時代の要請に応えたものであったと言えよう。小船は日本へ帰国後、主に新交響楽団にて指揮をする一方、ローゼンシュトックの要請により、彼の作品リストで判断する限り最も大作とってよいバレエ音楽「立正安国」を作曲、上演している（1942年）。また満州国に渡って新京交響楽団に客演するなど（1943年）その活躍は絶頂期を迎えたように見える。一方で戦争が長期化する中、国民を鼓舞するための野外演奏会で、従軍服姿で指揮する姿も残されている。

そして敗戦。小船のその後はどうなったのであろうか？ 簡潔に振り返ってみよう。戦後、横浜市立大学や横浜国立大学に講師として勤める以外は公職にはつかず、中央楽壇とも距離を置いたようである。その代わり、彼の後半生のライフワークとなったのは、若かりし1933年26歳の時に故郷横浜に設立したアマチュア・オーケストラ、横浜交響楽団の育成を中核とした、地方の音楽文化発展のための諸事業だった。横浜交響楽団は、1955年から1980年までプロオケでも中々できない月1回年12回の定期演奏会（その後年8回）を行なった。その間にはアマオケとして日本初のベートーヴェンの第九演奏会や、数々のオペラ公演も成功させるなどの活動を続け現在に至っている。そして小船は1977年11月、横響初の海外公演としてフィリピン、マニラにて2回の演奏会を指揮し、成功に導く。が帰国後、健康が悪化、翌1978年2月17日、心不全のため逝去した。享年76歳だった。

筆者が大変残念に思うのは小船が戦後すぐにほぼ作曲の筆を折ってしまったことである。シベリウスの励ましと己の音楽的信条の一致を知り、おそらく一層の精進を誓ったであろう、日本人の日本人による日本的なクラシック音楽を創造しようという思いは何故断ち切られてしまったのだろうか。今回お話を伺うことのできた横浜交響楽団理事長、小磯智功氏が語られることによれば「やはり戦争のせいでしょう」とのことだった。実は戦前戦中に活発に活動しながら、戦後作曲が振るわなくなった作曲家は何も小船幸次郎にとどまらない。先に紹介した、諸井三郎や池内友次郎も戦後の作品は少ない。それだけ日本全体を太平洋戦争という恐ろしい災厄に駆り立てた一種熱狂的な高揚感が、一挙に失墜したあとの精神的打撃、喪失感は深く、大きかったのだろう。

さてこの稿の締めくくりとして1956年シベリウスが亡くなった際に、小船幸次郎が雑誌「芸術新潮」1957年11月号に発表した長大な追悼文の一部を紹介しよう。

「……シベリウスの偉大さは音楽的伝統を何も持たないフィンランドに、その国の長い伝統の最後に生まれるような偉大な国民的音楽を、一人の力で築き上げてしまったことである。……彼の音楽は近代的な音を少しも用いないで、近代人の心とその悩みとを深く表現する。また萬人に理解される美しさを持つ反面、誰も寄せ付けない孤独と深淵を持っている。……

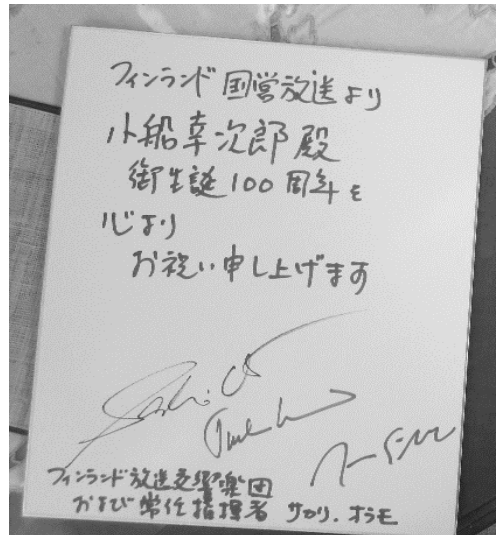
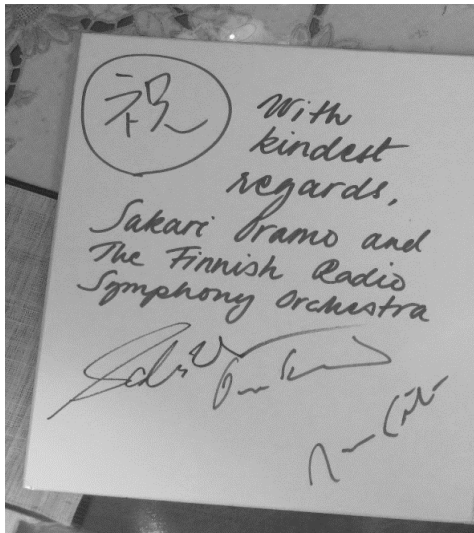
シベリウスの音楽は、フィンランドの自然と民謡の血と心とを持っているが、決して民謡が主体になっているものではない。……彼の内から出る旋律が総てフィンランドの民謡となり得る程、彼の心と音楽の隅々まで祖国フィンランドなのである」

(補遺) シベリウス、小船幸次郎、横浜交響楽団そして日本シベリウス協会の縁

今回の原稿執筆については横浜交響楽団の皆様に多大な御協力をいただきました。特に小船幸次郎と横浜交響楽団の歩みについて、5年の歳月をかけて「市民のオルガン」という大著に編纂された手塚賢一さんには、著書からの引用のご許可、写真、音源資料の提供等をしていただいたことを深く感謝いたします。また筆者の申し出に快く応じていただきご参集いただいた小磯理事長、事務局の中津川友子さん、手塚夫人の薫さんからは色々興味深いお話を聞くことができました。ありがとうございました。

そして横浜交響楽団と私たち日本シベリウス協会との意外な繋がりも知りました。「市民のオルガン」のあとがきにも記されているとおり、この著作をまとめるにあたり日本シベリウス協会の協力があったのです。新田会長をはじめ、谷口ゆきひろ理事、萩原唯一さんからも資料をいただいたとのこと。広く一般市民、青少年のための「オルガン」になりたいという趣旨から横浜交響楽団を育ててきた小船幸次郎の意志を継いで運営にあたられている、皆様の今後のご活躍を大いに期待します。

さて下記に掲載した2枚の色紙をご覧ください。これは小船幸次郎の生誕100周年を迎えた2007年に、横浜交響楽団からの依頼に応じてヘルシンキ放送交響楽団（当時のフィンランド放送交響楽団）から寄せられたものです。この仲立ちをされたのも当協会理事の飯田佐恵さんでした。（その後、手塚賢一さんは日本シベリウス協会に入会されました！）



当時の首席指揮者サカリ・オラモのサインもあります

(参考文献・資料)

「市民のオルガン 小船幸次郎と横浜交響楽団」横浜交響楽団編著 神奈川新聞社（2007年）

「日本の作曲家」 富樫 康 音楽之友社（1956年）

音楽芸術別冊「日本の作曲20世紀」 音楽之友社（1999年）

NHK-FM 片山杜秀「クラシックの迷宮」より〈生誕150年、シベリウスが聞いた日本の音楽〉

*「市民のオルガン」は協会資料にあります。小船幸次郎と横浜交響楽団に興味を持たれた方は是非事務局まで貸し出しのお申し込みを！！